

「伝えるということ」

熊本県立球磨中央高等学校
商業科 3年 今村 光花

地域活性化に貢献したい。これが私が活動をしている理由の1つだ。しかし、大きな権限や資金のない高校生である私が地域活性化という大きな目標にどうアプローチできるのか。これは私の今回の課題である。

私は、球磨中央高校の課題研究授業の1つである、チャレンジショップ班に所属している。チャレンジショップ班は「地元錦町の活性化」を目的とした組織である。これまで先輩方は、地元の特産品を使った商品開発や販売をおこなってきた。これらは専門的に学んできた商業の知識を最大限に生かす、商業高校らしい取組である。

そんなチャレンジショップ班が今年度挑戦したのは、地元、錦町にある「にしきひみつ基地ミュージアム」のガイドである。ガイドは多くの知識とコミュニケーション能力が必要となる非常に難しい仕事である。チャレンジショップ班にとって、全く新しく難易度の高い取り組みだ。

なぜ、私たちは前例も少なく難易度の高い取り組みに挑戦することにしたのか。それは、今年が戦後80年にあたることが大きく関わっている。「にしきひみつ基地ミュージアム」は、いわゆる戦争資料館である。そこには、地元錦町で起きた凄惨な戦争の資料が展示されている。実際に、部隊が使用

していた施設も見学することができる。私たちはそこで、地下魚雷調整場のガイドを担当することになった。

地下魚雷調整場はその名の通り地下に掘られた壕の中で魚雷を調整していた施設であり、私たちは5つのグループに分かれそれぞれのポイントのガイドを担当する。職員の方の力も借りながら、私たちは練習を重ね一通りのガイドができるようになった。

しかし、ガイドができるようになったところで、お客様を待っているだけでは意味がない。地域活性化のためには自分たちの活動を多くの人々に知って貰うことが必要なのだ。そこで、私たちは新聞やラジオ、テレビなどのメディアの協力を得た。情報化社会と言われる現代は、メディアの発信する情報に特に敏感である。それもあってか、実際に私たちの活動にも反響があった。熊本県で活動している私たちのガイドを聞きに、なんと、大阪からの修学旅行生が来たのだ。

私は、ガイドを通して、ガイドに最も重要なのはいかに「正確に記憶に残してもらうか」だと感じた。ただ、覚えた内容を声に出すだけでは、相手の記憶に残る情報はかなり少ない。しかも、私たちが伝えるのは戦争の歴史だ。ニュアンスではなく、情報の正確

さが求められる。では、どうしたらお客様に情報を正確に伝えることができるのか。それは「聞きやすさ」ではないかと私は思った。日本語は、同音異義語が多いため聞くことが中心となるガイドでそういう言葉を使うのは誤解などのリスクを生んでしまう。そこで、私たちは原稿の言い換えを行った。同音異義語や聞いただけではすぐに思い浮かばない専門用語などを、できるだけ簡単な言葉に言い換えることにしたのだ。そのおかげで、地域の中高生にガイドをおこなった際は、簡単な言葉での説明がわかりやすかったという意見が多く集まった。

ガイドを通して、「話して伝えることの大切さ」を学んだ。確かに、「聞く」という行為は「見る」や「読む」に対して、伝わりにくい方法かもしれない。しかし、私たちの想いを正確に伝えるには、絵や文字ではなく会話が必要なのだ。高校生の微々たる力で地域活性化をするのは決して簡単なことではない。商品開発をして購入していただいた商品から私たちの想いを感じとって貰うことも難しいだろう。

だからこそまずは、話して伝えるのだ。私たちが地域活性化に対してどう思っているのか、どんな想いがあって商品を開発し販売しているのか。高校生の力が微々たるものだからこそ、あなたの協力が必要であると伝える必要がある。

今までの活動で、地域の魅力や地元の方々の想いをたくさん知ることができた。一方で、地域づくりの担い手不足などの課題があったのも事実だ。私はそれらに向き合うことで新たに学べたことがあった。魅力も課題も、客観的に等身大で知ることができた。こうして学んできたことと、周りの協力があれば、きっと私たちは地域活性化を達成することができるのではないだろう

か。

私たちの活動は、今までの「商業高校らしい」方法とは少し違う。ガイドは、あえて学生がおこなうことで新しい価値を生み出すことができるのだ。これは、「学生らしい」方法と言えるのでは無いだろうか。もし、私たちの活動がモデルケースとなり、学生ガイドの基盤になれば、たとえ商業の専門的な知識がなくとも、地域活性化に貢献できるかもしれない。

球磨中央高校だけでなく、人吉球磨や日本全国の学校がガイドを通して、地域活性化に貢献することができるかもしれないのだ。

高校生の私が地域活性化という大きな目標にどうアプローチできるのかという、今回の課題は完全に答えが見つかった訳ではない。しかし、ガイドを通して学んだこと、考えたことは地域活性化につながっていると確信している。高校生という、地域の一番近くで、大切なふるさとの魅力を目一杯伝えることできる立場に居られる今。ガイドを通して学んだ、わかりやすく伝える工夫や仲間と協力して挑戦する力を活かして、まだ私のふるさとを知らない人々が、ふるさとを巣立った人々が、ふるさとで共に生きる人々が、ここを「守りたい」「応援したい」と思ってくれるように、私は人吉球磨の数えきれない魅力を伝えていきたい。